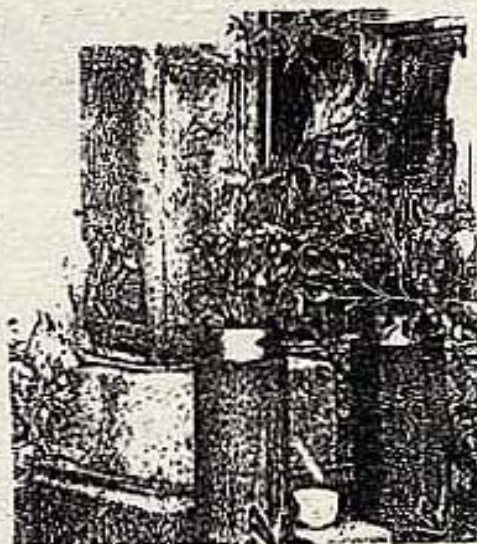


「金漢重（キムハンジュン）墓」

竹林寺本堂の裏に、表に「朝鮮 金漢重墓」、横に「明和甲申年二月十日卒」と彫られた碑が「香西哲雲墓碑」の横にあります。

これは、宝暦度（1764年）第11回目の朝鮮通信使（注：次の項で説明）の小童で、当時22歳で2児をもうけていた金漢重（号岷江（ミガン））の墓碑です。

彼の最後の様子は、慶応義塾大学所蔵の『宗家記録』の「宝暦信使記録下書」や『宝暦物語』に詳しく書かれているそうですが、辛基秀編の『わが町にきた朝鮮通信使Ⅰ』や伊ヶ崎淑彦氏の『朝鮮通信使のあとをたどる④』などを引用して以下に書いてみます。



金漢重の最後のように

正月28日に、厳寒の船旅で重病となり、病状が篤いという知らせを受けた対馬藩大坂屋敷では、出入医師で巧者という評判の平山文徴を船中に派遣して容態を診察させたところ、船では養生が難しいということで、結局竹林寺で養生することになった。

2月2日竹林寺客殿に移った金漢重は、はじめ滋陰降火湯（いんいりやうかとう、私注：空咳があり、痰がねばり、口が渇く人に飲ませる漢方薬）を飲ませていたが、血痰が出たので、薬法を改め、人參入りの補中益氣湯（じゆちうえききとう、私注：胃腸機能が弱く、疲労倦怠感や食欲不振のある人に飲ませる漢方薬）を調合した。さらに5日、五味異切散を服用させたが、病勢と衰弱は進む一方で、ついに2月10日帰らぬ人となった。

金漢重が余命いくばくも知れずとなった日の次のような話が残っている。

… 竹林寺の和尚が、近所の子どもを集め、かねて聞いていた金漢重の「故郷に置いた子どもに逢いたい」という願いを適えさそうと、よく似た年格好の子を選び、「父さん、今来たよ」と言わせた。しかし、そうした努力も空しく、彼は帰らぬ人となった。

「わが町にきた朝鮮通信使Ⅰ」・『朝鮮通信使のあとをたどる④』より引用



金漢重墓の裏面には、彼の辞世の句が刻されています。

「今春倭国客 去年韓人中
浮世何會定 可帰古地春」

また、住職は望郷の想いを残して死んだ隣国の客を弔って、次のような和歌を残しています。

「日の本に消えにし
露の玉ぞとは
知て新羅の人や待らむ」

⇨「松島公園内にある碑」から